

# 漁海況年報

平成21年1月1日～12月31日

## 【黒潮流路】

図1に黒潮流型の区分を、表1に近年の流型の経過を示した。また、図2には平成21年1～12月における月別の前半、後半の代表的な黒潮流路を示した。

平成21年の黒潮流路は、1月～4月上旬はC型で経過し、この間、1月前半には房総半島沖をS字状に大きく蛇行して北上し、また2月～3月には伊豆諸島海域での蛇行規模が拡大し32°N以南まで達した。その後、4月中旬は遠州灘と伊豆諸島の2か所で蛇行するW型、4月下旬～5月初旬はB型と、短期的に変化した。5月中旬～10月上旬は再びC型で経過し、この間、8月中旬には一時的にW型となり房総半島沖をS字状に大きく蛇行して北上し、さらに房総半島沖では8月後半～10月に大きく離岸した。

伊豆諸島海域では9月中旬以降接岸傾向を示し、黒潮流路は10月中旬にN型へ移行し、一時的に10月下旬後半～11月初旬には伊豆半島にかなり接近しB型となった。その後、小蛇行の東進により11月下旬はB,C型、12月はC型で経過した。

静岡県水産技術研究所  
(電話 054-627-1815)

静岡県水産技術研究所伊豆分場  
(電話 0558-22-0835)

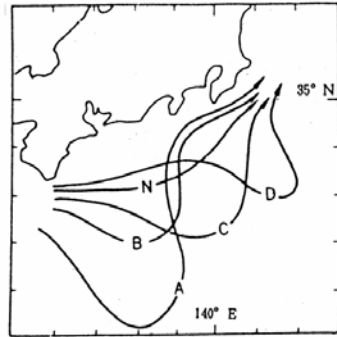


図1 黒潮流型の区分  
(海上保安庁海洋情報部より)

表1 黒潮流型一覧表

(資料：海洋速報(海上保安庁)・関東・東海海況速報)

年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月															
平成元年	B	C	C	C	DW	C	N	N	N	N	N	N	DN	B	A	A	A										
2年	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	AC	C	C	CD									
3年	C	C	C	C	C	C	C	C	C	CD	C	C	C	C	C	C	C	C									
4年	C	DC	N	N	N	N	BD	C	DN	N	N	N	N	D	N	N	N	NC	C	N	N	N					
5年	N	N	N	N	N	B	B	BC	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C				
6年	B	C	D	N	N	N	C	C	NN	N	N	N	N	B	BN	N	N	N	N	N	N	N	N				
7年	NN	N	N	N	N	N	B	B	B	C	C	C	D	D	NN	N	N	N	N	N	N	N	BC	C	CD		
8年	C	D	D	D	W	D	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	B	C	D	N	
9年	N	D	D	D	C	C	C	CW	D	ND	N	D	C	CNC	D	W	N	C	D	N	N	N	B	C			
10年	D	C	N	N	D	N	NW	N	N	N	NB	B	B	C	C	C	C	C	N	N	BC	C	C	C	C		
11年	CW	W	WB	C	C	C	C	C	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	BN	B	B	B	B	C	C		
12年	C	C	CW	W	W	WB	B	BC	CW	WB	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	CW	CW	CB	B	
13年	C	C	C	C	CD	C	C	C	WN	B	C	C	C	C	C	C	C	WB	BC	C	C	CD	DW	WD	DN	C	
14年	N	N	N	N	N	N	N	N	NB	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N		
15年	N	N	N	N	N	N	D	NW	WN	B	BC	D	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N		
16年	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	NA	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A		
17年	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	D	DN	N	N	N		
18年	N	N	N	NB	C	CWC	CN	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	BN	C	NC	C	D	DN	N
19年	N	BC	D	B	B	C	C	C	C	C	C	N	B	C	C	C	C	C	C	W	N	C	C	C	D		
20年	C	C	N	N	N	N	N	B	B	C	C	C	C	CD	C	C	C	C	CD	C	C	C	C	C	C		
21年	C	C	C	C	C	C	CW	WB	C	C	C	C	C	C	C	CW	WC	C	C	CN	NB	BN	BC	C	C		

\*静岡県水産技術研究所一部改変

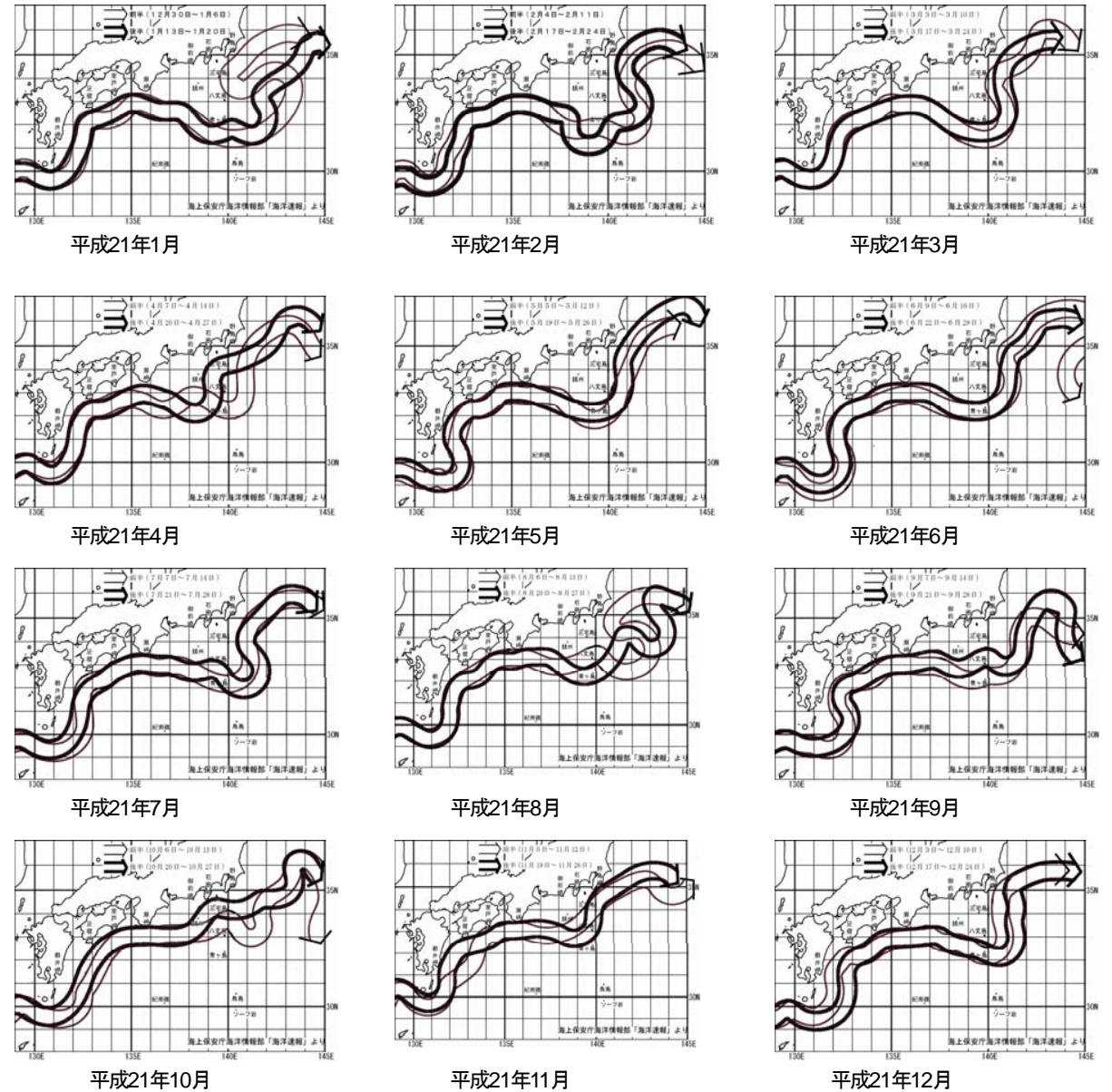


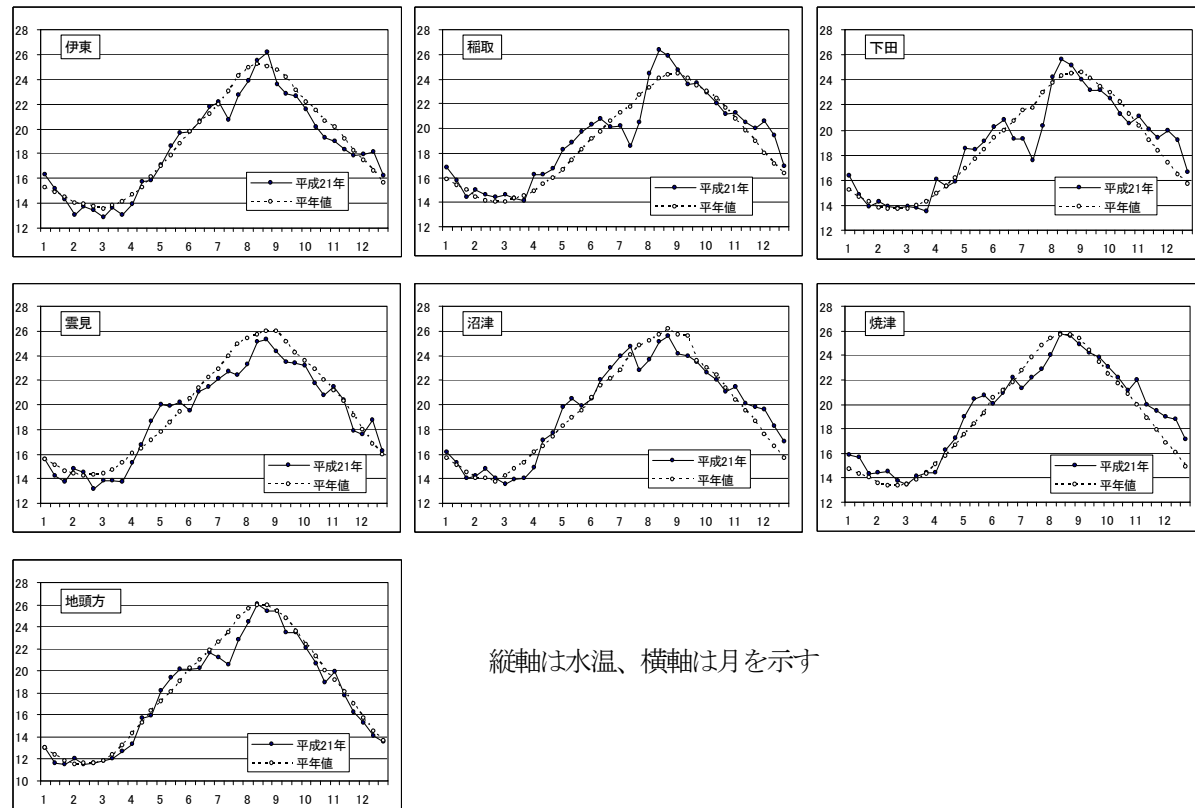
図2 黒潮流軸の変動(海上保安庁海洋情報部「海洋速報」より)

**【県下沿岸域】**

図3に平成21年1～12月の沿岸水温の変化を旬別に示した。沿岸水温は、1月～2月は概ね「平年並み」、3月～4月上旬は「平年並～低め」、4月中旬～5月下旬は「平年並～高め」、6月は「平年並～やや低め」、7月は「低め」、8月は相模湾側では「やや高め」、駿河湾側では「低め」、9月～10月は「平年並～低め」、11月以降は「平年並～高め」で経過した。

1月上旬には黒潮北上部からの暖水波及により相模湾側の水温がやや高めとなり、また2月9日以降には駿河湾東部に暖水波及がみられ駿河湾では中旬の水温がやや高めとなった。3月下旬後半には遠州灘に黒潮の小規模な接岸変動に伴う暖水波及がみられた。4月下旬には黒潮流路の短期変化に伴う暖水波及により高水温を観測した。10月下旬後半には黒潮流路が伊豆半島にかなり接近し強勢な暖水波及がみられ、駿河湾東部では水温が急上昇した。この暖水波及は内側反流として熊野灘まで達した。12月上旬～中旬は伊豆諸島北部から、下旬には遠州灘沖から、それぞれ暖水が波及平年よりも高めの水温となった。

一方、6月下旬および7月には沿岸湧昇により駿河湾西岸と伊豆半島東岸で極めて低水温となった。8～9月は冷水域が伊豆諸島海域に分布し沿岸への暖水波及はなく沿岸水温は低め基調で経過した。



縦軸は水温、横軸は月を示す

図3 平成21年1～12月の旬別沿岸水温の変化

**【サバたもすくい棒受網】**

**1 たもすくい**

平成21年の伊豆諸島海域におけるたもすくい漁は、1月18日から（棒受網は1月20日から）三宅三本漁場でゴマサバを対象として始まり、中下旬の1日1隻あたり水揚量は7～13トンであった。マサバの操業は、1月末に西方から波及した暖水の影響で、2月2日に表面水温16℃台のひょうたん瀬で始まった。その後、ひょうたん瀬の水温は徐々に低下したが、13℃台となった3月中旬まではマサバ1～5トン、ゴマサバ0.5～2トンの漁況が続いた。3月下旬～4月上旬は大室出し～利島が漁場となり、一時期を除きマサバ1トン程度、ゴマサバ2～3トンの漁況となった。4月中旬、黒潮がB型流路に移行する際に一時的に三宅島付近に暖水が波及し、三本にマサバ漁場が形成されたが、その後、黒潮が三宅島付近を直接通過したため、下旬には再び大室出しが漁場になり、5月下旬まで継続した。特に4月下旬はマサバ6トンの漁況で、本漁期最高の好漁となった。6月上旬以降、マサバの漁場形成は見られず、ゴマサバ対象に7月上旬まで三宅島南東沖等で操業が行われた。本漁期の特徴として、産卵期前のマサバ漁場は通常表面水温16℃以上で形成されるが、14℃に低下するまで漁場が継続したこと、三本で17年ぶりにマサバ漁場が形成されたことが挙げられる。

マサバは尾叉長30～40cmの群が漁獲の主体となり、モードは32cmついで37cmに見られた（図4）。推定した年齢別漁獲尾数によれば、卓越年級群である2004年級群に次ぐ豊度とされる2歳魚\*1（2007年級群）が漁獲の主体となり、5歳魚（2004年級群）の出現割合も近年の中では高かったが、1歳魚（2008年級群）の割合は前年に比べて少なかった。

ゴマサバは尾叉長27～35cmの群が漁獲の主体となり、モードは30cmに見られた（図4）。推定した年齢別漁獲尾数によれば、近年の平均を上回る加入豊度とされる2歳魚\*1（2007年級群）が漁獲の主体となった。

平成21年1～6月の千葉県・神奈川県・静岡県主要7港\*2におけるたもすくい水揚量は、マサバが983トンで前年（711トン）の138%、ゴマサバが1,257トンで前年（2,293トン）の55%であった。マサバ水揚量が前年を上回った理由として、漁獲の主体となったマサバ2歳魚の来遊水準が高く5歳魚も加わったことが考えられた。ゴマサバ水揚量が前年を下回った理由として、マサバに漁獲努力が傾注されたこと、魚体が比較的小さく鮮魚向けの割合が高くなかったことが考えられた。

\*1 年齢は1月に加齢し、平成21年（2009年）時のものを示した。

\*2 千倉・富浦（千葉県）、三崎・長井（神奈川県）、伊東・沼津・小川（静岡県）の7港。

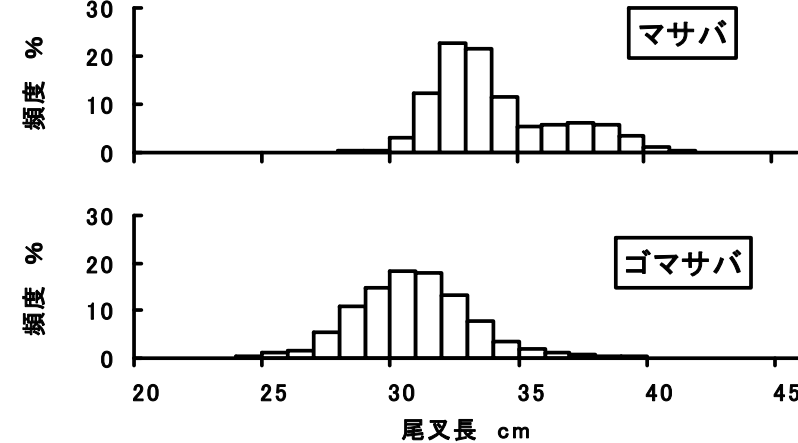


図4 平成21年1～6月のたもすくいによるマサバ尾叉長組成（上）とゴマサバ尾叉長組成（下）



## 2 棒受網

平成21年における静岡県棒受網船は、2～3月にマサバ狙いのたもすくいへの転換もあったものの、年を通じて三本、三宅など三宅島周辺海域でゴマサバ主体の操業を行った。また、5～6月には銭洲周辺海域への出漁も見られた。平成21年の静岡県主要4港\*<sup>3</sup>における棒受網（一部たもすくいも含む）の1日1隻あたりゴマサバ水揚量は20.0トンで、前年（25.5トン）の78%、平成19年（14.2トン）の141%であった。経月変化をみると、1～6月は14.5トンであったが、7～12月は後述する0歳魚（2009年級群）の加入等により30.0トンと高水準になった。

漁獲されたゴマサバの7～12月（1～6月はたもすくいとはほぼ同じ）の尾叉長範囲は20～40cmであったが、10月以降30cm以上の割合が少なくなり小型魚主体となった。すなわち、7月の体長モードは27cmに見られ、8月は22cm、28cmモード、9月は23cm、28cmモードの二峰となり、10月は24cmモード、11月は23cm、28～29cmモードの二峰と経過した。年齢査定の結果、7～8月は、1歳魚（2008年級群）主体であったが、9～12月は、8月後半に出現した0歳魚（2009年級群）が主体となった。0歳魚（2009年級群）の出現状況は、前年の0歳魚（2008年級群）が11月に僅かにみられたのみであったのと対照的であった。また、6月まで主体となっていた2歳魚（2007年級群）は、10月以降ほとんど漁獲されなくなったが、12月に再び漁獲対象となった。

平成21年の静岡県主要4港における棒受網の水揚量は、マサバが693トンで前年（346トン）の200%、ゴマサバが8,841トンで前年（14,534トン）の61%であった。サバ類全体としては、9,534トンで前年（14,880トン）の64%であった。マサバ水揚量が前年を上回った理由として、たもすくいと同様に2歳魚の来遊水準が高かったことが考えられる。また、ゴマサバ水揚量が前年を下回った理由として、たもすくいへの転換等によりマサバに漁獲努力が傾注されたこと、前年は8月以降もサバ操業を行ったサンマ兼業船の一部がサンマ漁に出漁したこと等が考えられる。

\*3 伊東、静浦、沼津、小川の4港。

### 3 小川港におけるサバ類単価

平成21年の小川港における棒受網（一部たもすくいも含む）のサバ類月別単価は、マサバが108～486円/kg（2～5月）、ゴマサバが36～75円/kgであった。水揚の主体となったゴマサバは9～12月には50円/kgを下回って推移した。この理由として、9月以降、小型魚（0歳魚）が主体となったこと、平成19年以降のサバ加工原魚魚価を押し上げてきた輸出が平成21年になり低調となったことが考えられた。

表2 小川港（焼津市）における棒受網・たもすくいのサバ類月別単価

		単位：/kg											
年	魚種	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平成18年 (2006)	マサバ	—	—	64	118	61	—	—	—	—	—	72	56
	ゴマサバ	52	48	53	68	43	60	62	40	38	49	49	41
平成19年 (2007)	マサバ	129	236	185	156	124	140	184	—	—	—	—	—
	ゴマサバ	50	53	51	71	72	57	74	60	58	63	80	95
平成20年 (2008)	マサバ	—	315	489	315	173	—	—	—	—	—	—	—
	ゴマサバ	98	96	92	83	78	90	72	61	51	48	56	58
平成21年 (2009)	マサバ	—	486	405	169	108	—	—	—	—	—	—	—
	ゴマサバ	53	75	56	56	56	56	54	50	38	36	36	37

### [サクラエビ船曳網]

平成21年の春漁は、3月29日夜～6月2日夜にかけて操業が行われた。出漁日数は17日、漁獲量

は859トンで、漁場は主に富士川～由比沖と焼津～大井川沖に形成された（前年の出漁日数は19日、漁獲量は1,298トン）。漁獲されたサクラエビは、平均体長33.7mmの当歳エビ（前年は37.9mm）と平均体長41.2mm（前年は42.8mm）が主体であった。

秋漁は10月28日夜～12月24日夜にかけて操業が行われた。出漁日数は11日、漁獲量は446トン、漁場は主に焼津～榛原沖に形成された（前年の出漁日数は11日、漁獲量は542トン）。漁獲されたサクラエビは、平均体長32.0mmの当歳エビ（前年は31.5mm）と平均体長40.3mmの1歳エビ（前年は41.1mm）の2群で構成された。

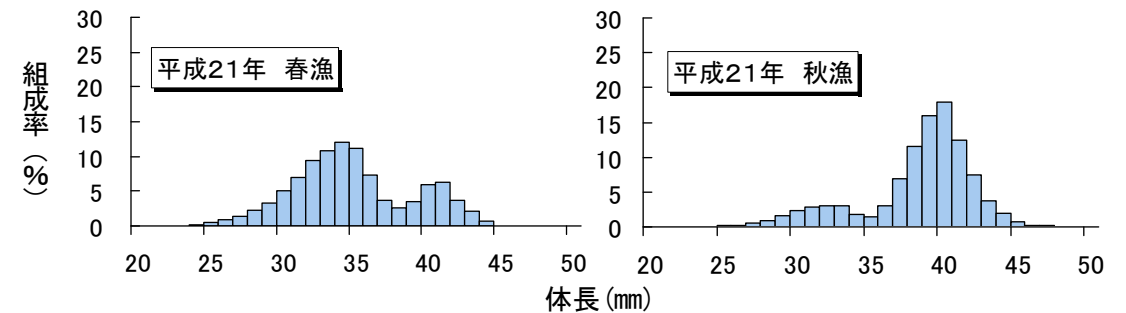


図5 平成21年春・秋漁のサクラエビ体長組成

### [竿釣近海カツオ]

・水揚量と魚価

平成21年の静岡県主要5港（沼津、清水、焼津、小川、御前崎）における近海竿釣り船の水揚量は、2,171トンで平成20年の1,438トンを下回り、過去5年平均（2,561トン）の85%であった。魚価は438円/kgで平成20年の436円/kgを上回った。

・漁況（漁場形成と魚体）

近海竿釣り船のQRY、御前崎港での市場調査によれば、漁況はおおむね下記のとおり推移した。

- 1月 近海竿釣り船は、中旬から今年の操業を開始し、小笠原諸島海域でカツオを漁獲した。
- 2月 21°～23°N、135°～138°Eで特大（尾叉長66cmモード）、大、中（尾叉長55cmモード）カツオを漁獲した。また、海形場（瀬）では、キハダに混じり小カツオ（尾叉長47cmモード）を漁獲した。
- 3月 23°～28°N、132°～137°Eで大、中（尾叉長57cmモード）、特大（尾叉長65～66cmモード）、カツオを漁獲した。また、瀬では、キハダに混じり小、極小（尾叉長42cmモード）カツオを漁獲した。
- 4月 20°～27°N、135°～142°Eで小（尾叉長45cmモード）、極小、中（尾叉長51cmモード）カツオを主体に漁獲した。
- 5月 28°～34°N、138°～140°Eで小（尾叉長44cmモード）、極小、中カツオを主体に漁獲した。
- 6月 静岡県近海では青ヶ島、ハロース、鳥島周辺で小・極小（尾叉長44cmモード）、中カツオを漁獲した。なお、下旬には駿河湾沖の暖水波及先端部（23℃台）でも漁場が形成された。
- 7月 静岡県近海では遠州灘から駿河湾沖で小・中（尾叉長48cmモード）カツオを主体に漁獲した。また、チン（35cmモード）カツオも混獲された。
- 8月 静岡県近海では青ヶ島、銭洲、ハロース等で、小（尾叉長47cmモード）・中カツオを主体に漁獲した。また、極小・チンカツオの割合が増加した。

- 9月 静岡県近海では上・中旬は青ヶ島、ハロース等、下旬は御前崎沖で、極小（尾叉長42cmモード）、小（尾叉長48cmモード）、中大カツオを漁獲した。
- 10月 静岡県近海では金洲から石廊崎沖で、極小・小（尾叉長41cmモード）、中・大（尾叉長57cmモード）カツオを漁獲した。
- 11月 静岡県近海では御前崎沖から相模湾にかけて、極小・小（尾叉長42cmモード）、中・大（尾叉長58cmモード）カツオを漁獲した。
- 12月 静岡県近海では駿河湾内から金洲にかけて、小・極小（尾叉長44cmモード）、中・大（尾叉長58cmモード）カツオを漁獲した。

表3 平成21年近海釣り船のカツオ水揚量等（県内主要5港）

年月	水揚量(トン)	水揚隻数	水揚/隻(トン)	平均単価(円/kg)	主漁場と魚体(体長cm)
21年 1月	51	4	12.8	348	小笠原諸島周辺
2月	280	19	14.7	246	小笠原諸島周辺(47、55、66cmモード)
3月	290	27	10.7	518	小笠原諸島周辺(42、57、65cmモード)
4月	281	40	7.0	558	小笠原諸島周辺(45、51cmモード)
5月	249	55	4.5	460	伊豆諸島周辺(44cmモード)
6月	304	48	6.3	309	伊豆諸島周辺(44cmモード)
7月	306	121	2.5	474	遠州灘、駿河湾沖(35、48cmモード)
8月	193	77	2.5	489	青ヶ島、銭洲、ハロース(47cmモード)
9月	61	27	2.3	335	青ヶ島、ハロース(42、48cmモード)
10月	91	62	1.5	479	金洲から石廊崎沖(41、57cmモード)
11月	58	46	1.3	641	御前崎沖から相模湾(42、58cmモード)
12月	7	10	0.7	751	駿河湾から金洲(44、58cmモード)
21年 計	2,171	536	4.1	438	
20年 計	1,438	325	4.4	436	
5か年平均	2,561	540	4.7	365	平成16～20年の平均

【まき網】

1 マイワシ

本年の静浦漁港における総水揚量は25.0トンで、前年(5.7トン)の4.4倍であったが、平年(過去5か年平均:120.3トン)に対して21%と低調であった。

沼津港における総水揚量は2,379.4トンで、前年(288.7トン)の8.2倍、平年(過去5か年平均:847.1トン)の2.8倍と好調であった。総水揚量に対し10月が34%と最も多く、以下6月が24%、5月が12%であった。

小川港における総水揚量は704.6トンで、前年(89.1トン)の7.9倍、平年(320.7トン)の2.2倍と好調であった。総水揚量に対し10月が59%と最も多く、以下8月が10%、11月が9%であった。

伊東港における総水揚量は958.0トンで、前年(61.9トン)の15倍、平年(53.4トン)の18倍と、極めて好調であった。総水揚量に対し12月が37%と最も多く、以下8月が26%、7月が18%であった。

2 カタクチイワシ

本年の静浦漁港における総水揚量は355.1トンで、前年(382.1トン)の93%、平年(1,038.2トン)の34%と、前年および平年を下回った。5～6月だけ水揚があり、5月は、総水揚量の63%であった。

沼津港における総水揚量は0.8トンで、前年(185.0トン)の0.4%、平年(過去5か年平均:77.4トン)の1%と極めて低調であった。1月しか水揚がなかった。

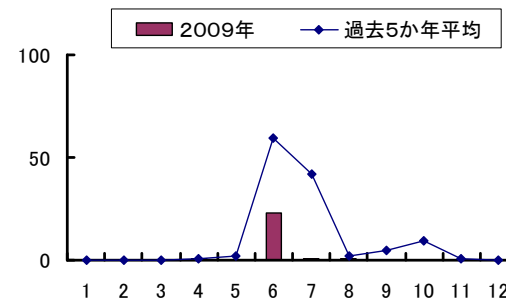


図6 静浦漁港マイワシ月別水揚量の推移

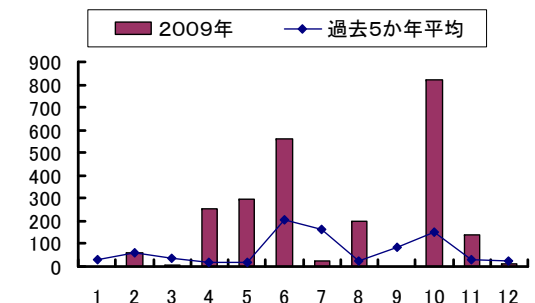


図7 沼津港マイワシ月別水揚量の推移

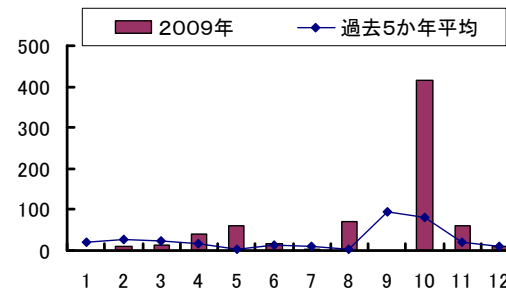


図8 小川港マイワシ月別水揚量の推移

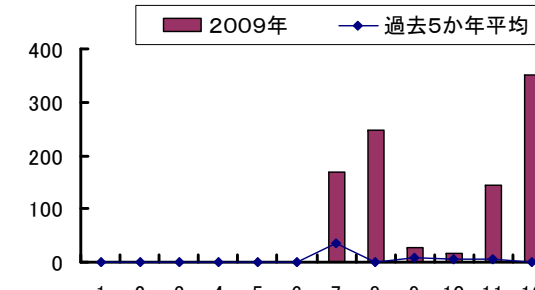


図9 伊東港マイワシ月別水揚量の推移

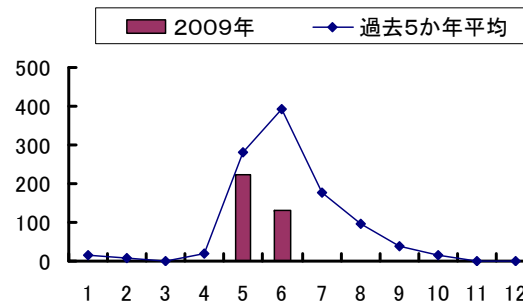


図10 静浦漁港カタクチイワシ月別水揚量の推移

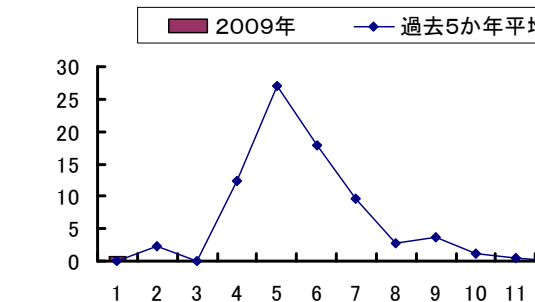


図11 沼津港カタクチイワシ月別水揚量の推移

(注) 図6～11の縦軸は水揚量(トン)、横軸は水揚月

【シラス船曳網】

平成21年シラス漁は3月21日から始まった。3～12月の主要6港(静岡、吉田、御前崎、遠州、

舞阪、新居)における総水揚量は6,387トンで、前年(7,472トン)の85%、平年(6,187トン)の103%と、前年を下回ったが平年並みであった。総水揚金額は3,899,676千円で、前年(4,170,057千円)の94%、平年(3,981,934千円)の98%と、前年を下回ったが平年並みであった。平均単価は611円/kgと前年(558円/kg)の109%、平年(644円/kg)の95%だった。

1日1か統当りの水揚量の推移を月別にみると、3月は平均42kg(駿河湾42kg、遠州灘10kg)、4月上旬は133kg(駿河湾92kg、遠州灘211kg)と解禁当初は不振であったが、4月中旬には326kg、下旬には476kgと上向いてきた。月全体では369kg(駿河湾343kg、遠州灘386kg)と平年(332kg)を上回った。5月に入ると低調となり、月全体では166kg(駿河湾90kg、遠州灘210kg)と平年(538kg)を大きく下回った。6月に入ると、上旬410kg、中旬564kg、下旬577kgと漁況は好転した。月全体では507kg(駿河湾443kg、遠州灘535kg)と平年(487kg)並みになった。7月は、上旬527kg、中旬503kg、下旬718kgと好調に継続し、月全体では592kg(駿河湾536kg、遠州灘620kg)と平年(304kg)を大きく上回った。8月も、上旬710kg、中旬872kgと好調であったが、下旬は487kgと落ち込んだ。月全体では698kg(駿河湾719kg、遠州灘684kg)と平年(337kg)を大きく上回った。9月になると上旬404kg、中旬281kg、下旬376kgと低調になってきた。月全体では362kg(駿河湾331kg、遠州灘377kg)で平年(356kg)並みとなった。10月は221kg(駿河湾163kg、遠州灘253kg)で平年(264kg)を下回った。その後、11月は140kg(駿河湾118kg、遠州灘156kg)で平年(110kg)を上回った。12月も129kg(駿河湾64kg、遠州灘195kg)で、平年(78kg)を上回った。

水揚量の推移を月別にみると、3月は6トンで平年同期(147トン)の4%、4月は622トンで平年同期(770トン)の81%、5月は137トンで平年同期(1,400トン)の10%と平年を下回っていた。その後、漁模様が転じて、6月には1,467トンと平年同期(1,024トン)の1.4倍、7月には1,461トンで平年同期(577トン)の2.5倍、8月は1,306トンと平年同期(659トン)の2.0倍と平年を上回った。しかし、9月には漁が落ち込み、767トンと平年同期(792トン)の97%と平年並み、10月は352トンで平年同期(606トン)の58%と平年を下回った。その後、11月には165トンと平年同期(155トン)の107%、12月には105トンで平年同期(58トン)の1.8倍と平年を上回った。

平均単価を月別にみると、低調であった5月までと好漁に転じた6月は平年並みから高めであったが、7月以降は平年を下回り、年平均でも平年の88%と下回った。

今漁期の特徴としては、4月に黒潮系の暖水波及により一時的な漁況の好転があったものの解禁時から5月まで低調となり、6月以降は好調に推移したことがあげられる。これは、年間の漁獲パターンでは春不調パターンに属する。また、9月以降は通常の春不調パターンから期待されたほどは獲れなかった。春漁が低調であった要因として、解禁前の冬季に黒潮はC型流路で離岸しており、暖水波及が少なく、シラスの補給が少なかったこと、4月に黒潮系の暖水波及があったものの、5月になると黒潮は再びC型流路となり離岸し暖水波及はなかったことが考えられる。春不調パターンでは6月以降漁況が好転することが知られており、そのとおりの経過となった。好調になった要因として、5月以降の駿河湾内の卵稚仔調査でのカタクチイワシ卵稚仔採集量が多かったことからそれが成長し加入してきたことが考えられる。

注) 平年：過去5か年平均

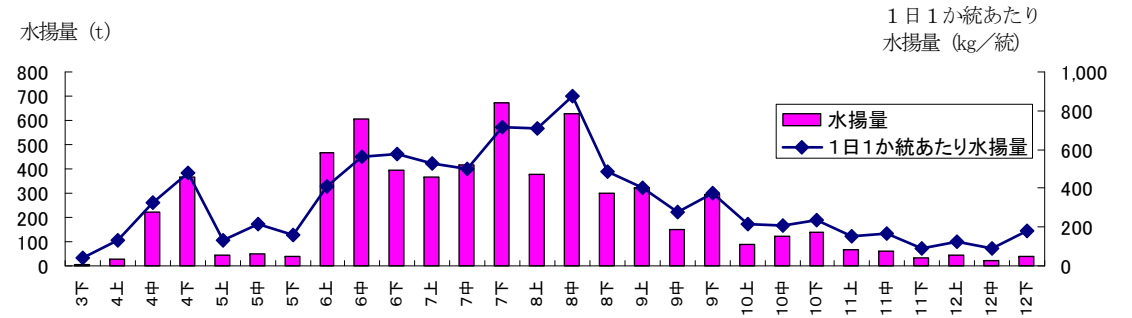


図12 平成21年主要6港旬別シラス水揚量と1日1か統あたり水揚量の推移

### 【定置網】

平成21年の伊豆半島東岸大型定置網8か統(伊豆山、古網、赤石、川奈、富戸、赤沢、北川、谷津)の漁獲量は4,632トンで、これは前年漁獲量4,044トンの114%、平年漁獲量(昭和57年～平成20年平均)3,864トンの120%であった。月別にみると、漁獲量が最も多かったのは12月の598トンで、漁獲量が最も少なかったのは7月の147トンであった。また、前年最も漁獲量が少なかった1月が2番目に多く593トンで、前年の515%、平年の342%と、昭和57年以降のこの月の漁獲量として最多であった。魚種(銘柄)別漁獲量の上位10種は以下の通りであった。

- 1 サバ類(さばっこを除く)：1,659トン(前年の124%、平年の192%)
- 2 カタクチイワシ：636トン(前年の104%、平年の194%)
- 3 マアジ(じんだを除く)：539トン(前年の88%、平年の75%)
- 4 スルメイカ：433トン(前年の192%、平年の287%)
- 5 さばっこ：196トン(前年の4279%、平年の239%)
- 6 マイワシ：149トン(前年の349%、平年の40%)
- 7 銘柄わらさ：147トン(前年の132%、平年の253%)
- 8 イサキ：119トン(前年の209%、平年の235%)
- 9 銘柄わかし：112トン(前年の728%、平年の760%)
- 10 マルソウダ：97トン(前年の25%、平年の48%)

サバ類(さばっこを除く)は、年間を通じてゴマサバが主体で、1月に243トンと昭和57年以降で最も多く平年の17倍以上漁獲され、2月も平年の6倍以上であった。3月は平年の41%、4月は10%以下ときわめて低調だったが、4～5月はほぼ平年並みとなり、7月には平年を大きく下回ったが、8～10月には再び平年並みとなった。11～12月には再び前年及び平年を大きく上回り、11月には436トンと昭和57年以降で最も多く漁獲され、12月にも過去最多であった前年並みの332トンの漁獲があった。年間漁獲量は前年の124%、平年の192%と上回り、昭和57年以降で2番目に多く漁獲された。マサバは1月に27トンとゴマサバと統計的に区分された平成9年以降で最も多く漁獲された。4月には前年及び平年を大きく下回ったが、5月に43トンと前年及び平年を上回り、6月以降は再び前年及び平年を下回った。年間では96トンが漁獲され、前年の186%、平年の155%と前年及び平年を上回った。2009年級群は「さばっこ」として9月以降平年を上回る漁獲が続き、10月に75トン、11月に56トン、12月に32トンと昭和57年以降最大の漁獲が続き、年間196トンと前年及び平年を大きく上回った。また、漁獲されたサバ類のサイズは1月はゴマサバの尾叉長のモードは32cmで3月までこのサイズが続き、5月には33cmのほか24cmと小型化のものもみられ、6月以降は31～34cmにモ



ードがみられたが、9月には23cmとさばっことモードが重なった。10月にはモードは再び32cmとなり、11～12月は33cmであった。マサバの尾叉長のモードは1月にはゴマサバと同様の32cmにみられたが、5月にはモードは26cmと小型になり、6～7月には35cmにモードがみられ、11月にはモードが24cmと小型のものがゴマサバ主体のさばっこに混じって漁獲されていた。

カタクチワシは、1月に前年及び平年を上回り、4～6月には平年を上回り、5月には114トンと前年及び平年を大きく上回り、昭和57年以降で最も多く漁獲された。7～10月はほとんど漁獲がなかったが、例年ほとんど漁獲がなかった11月に22トンと昭和57年以降で最も多く漁獲され、12月も105トンと多かった前年を上回り平年を大きく上回った。また、年間漁獲量は好調だった前年並みで平年を大きく上回った。

マアジは、2月は前年及び平年を大きく上回り、3月も平年をやや上回ったものの、4月には大きく減少して平年を下回った。5月には最も多い213トンが漁獲され、再び平年をやや上回ったが、下半期にはすべての月で前年及び平年を下回り、年間漁獲量も539トンで前年及び平年を下回った。マアジじんだは3月に1日だけ突発的な入網があったが、本格的な漁獲は5月から始まり、6月には4トンの漁獲があったが、4月以降のすべての月において平年を下回り、年間でも7.7トンと前年及び平年を下回った。漁獲サイズは2～3月は尾叉長のモード18～19cmの1歳魚中心で、4～6月には18～20cmの1歳魚と、モード25cmの2歳魚中心に漁獲され、6月にはこれらの群に加えてじんだ銘柄のモード10cmの当歳魚もみられた。7月には21cmの1歳魚中心となったが、じんだ銘柄の13cmの当歳魚も見られ、8月になると小あじ銘柄として13cmの当歳魚が漁獲の中心となった。9月にはモード17cmの群が中心となり、10月以降は20～21cmの1歳魚が中心となり、本来主群となるべき当歳魚がきわめて少なかった。

スルメイカは1月に238トンと昭和57年以降で最も多く漁獲されたのを始め2月と6～8月に好調で、年間漁獲量は前年及び平年を上回り、昭和57年以降で最も多く漁獲された。

マイワシは2月と5月に前年及び平年を大きく上回ったが、年間漁獲量は前年を大きく上回ったものの平年を下回った。

ブリは、銘柄ぶりの漁獲量は42トン(5,864尾)で前年及び平年を下回った。2月に2,353本、4月に2,998本入網し、魚体は3歳魚(2006年級群)主体であった。また、銘柄わらさが6月に84トン入網し、年間漁獲量は147トンと前年及び平年を上回った。銘柄いなだの漁獲量は8月に25トン漁獲されたのを始め年間漁獲量は47トンと前年及び平年を上回った。2009年級群である銘柄わかしの漁獲量は9月に96トンと昭和57年以降で最も多く漁獲され、年間漁獲量も112トンで、前年及び平年を大きく上まわった。

イサキは10月に78トンと昭和57年以降で最も多く漁獲されたのを始め、年間漁獲量は前年及び平年を上回った。

マルソウダは1月に6トンと昭和57年以降で最も多く漁獲され、9月には前年及び平年を上回ったが、それ以外の月は平年を大きく下回り、年間漁獲量は前年及び平年を大きく下回った。

<12月号定置網水揚量の訂正>

8ヵ所合計：593t→598t、1漁場当たり：84.7t→85.4t

静岡県水産技術研究所のホームページ

パソコンからは…… <http://fish-exp.pref.shizuoka.jp/>

携帯電話からは…… <http://fish-exp.pref.shizuoka.jp/imode/index.htm>

右のQRコードをご利用ください。人工衛星NOAA

